第十二回ワークショップ（合評会）

2011 年 11 月 30 日開催

■合評テクスト

大河内　泰樹

2006　「規範という暴力に対する倫理的な態度：バトラーにおける「批判」と「倫理」」『現代思想 臨時増刊　総特集ジュディス・バトラー　触発する思想』第 34 巻第 12 号、pp. 140-151。

まず、大河内氏から本稿執筆の経緯と概略について説明があった。大河内氏は、自己変革をしながら社会を組み替えるという在り方を後期フーコーとヘーゲルを繋げる事で考察しようとしており、その線でバトラーに興味があったと述べた。

大河内氏の説明を踏まえて、以下４点について議論された。

Ⅰ　テキスト理解
Ⅱ　自分自身を説明しようとしない人達に対する啓蒙か？
Ⅲ　メタ判断
Ⅳ　livable を求める権利要求が排除を伴う場合

Ⅰ　テキスト理解

倫理とは何か、という基本的な問いが出た（武村氏）。大河内氏から、本稿で説明しようとしたバトラーの理論的営みを形容する際に倫理的態度としかいいようがなく、それは他者に対してどう向き合うかという問題に関わるものだの回答があった（大河内氏）。更に、倫理的であることと倫理はどう違うのかという疑問が出された（武村氏）。本稿では区別をはっきり意識していたわけではなかった、区別するならばバトラーが批判する「倫理」にたいして、これにたいするバトラーの態度を倫理的と呼べるだろうとの回答があった（大河内氏）。それを受けて、本稿で鍵括弧の付された倫理とそれのない倫理という表記があるが、鍵括弧付の方の意味は何かとの問いが出た

（武村氏）。大河内氏は、倫理の有する暴力性を問題にする場合に鍵括弧を付したつもりだと述べた上で、バトラーは倫理を批判しながらも、倫理を批判するという倫理的な態度を持つという捻れた事をやろうとしていると述べた（大河内氏）。武村氏はわかるような気がすると述べた上で、本稿では既存価値への異議申し立てと倫理的態度が近い意味で用いられている一方で、「規範／倫理を批判する」（p. 145）とあるように倫理は既存価値を統御するものとしても語られているが、バトラーのいう倫理とは、象徴界を統べるものとしての倫理と、自己批判する倫理的態度という意味での倫理が裏表に張り付いているものである、というのが大河内氏の理解かと問うた（武村氏）。大河内氏はそうだと述べた（大河内氏）。

続けて井頭氏は、二つの異なる排除概念――アルチュセールの呼びかけの例に見るような概念的に想定された上で排除される場合と、ラカンの象徴界の例に見えるような同一化不可能なものを排除するという場合――が語られていると思うが、本稿の立脚点はどちらかと問うた（井頭氏）。これに対し、前者は主体形成一般に妥当する話で、後者は同定できないものに対して権力が何らかのアイデンティティを貼り付けて排除するという話であって、単に主体が構造的に徹底されるだけなら主体のズレは生じないはずだが、そこにズレが生じるような存在があるということだと大河内氏から回答があった（大河内氏）。そうであれば、既存秩序で使えるラベルを貼って排除するというやり方の場合、排除される側の自己理解を承認させるという事をしなければならないということが既存秩序の再分節化に繋がっていくのだろうが、その作業は既存秩序にはないカテゴリーを用いてなされるはずなのに既存秩序内でなされる必要があるとも述べられており、それがどのような装置を使ってなされているのかという問いが出された（井頭氏）。大河内氏は、色々と方法はあり、例えば新しい語を流通させる（ex. ゲイという語ではなく、元々悪口だったクィアという用語を転用する）ことで社会的承認を得ることがあると述べた上で、そうしたことは直接物質的な生存に関わらないレベルで命に関わるような問題としてアイデンティティの問題があるからこそ承認の要請があると説明した（大河内氏）。それに関して井頭氏から、ラベルを貼られてままでは生きて行けないが、既存秩序のラベルを捨て去ることとは違う仕方で生活空間を確保していく仕方そのものが新しい概念活動を生み出すという形だという理解で正しいのか、そうれあれば livability を既存の規範空間内に作り出すことが先行しているのかという確認があった（井頭氏）。これに対し、その通りであり、言説空間の組み替えるの前提となる livability の確保を倫理的態度とバトラーは呼ぶのだとの回答があった（大河内氏）。

次に井川氏から、本稿のまとめ方がほぼ全面的に賛同できるとの声があった（井川氏）。その上で井川氏は、アルチュセールの呼びかけの話について、神による呼びかけという宗教的比喩によって振り替えざるをえない状況を前提としているからこそバ

トラーはアルチュセールを批判したのであり、当初バトラー自身は警官の呼びかけのモデル自体は否定していなかったが、『自分自身を説明すること』においてアルチュセールの議論を受け入れ過ぎたと自己反省し、撹乱のような違った種類の振り向き方を考えていると指摘した（井川氏）。更に井川氏は、“Who are you?”の問いに見るような言語化以前の suspectibility が暴力的である可能性を指摘し、倫理的な呼びかけに乗って関係に巻き込まれていて判断の問題を考慮していないのがバトラーの弱点だと自分には思えるが、誰が私に問い掛けていることを不断のプロセスだけではバトラーの議論は弱いと思うかと問うた（井川氏）。これに対し、それは判断以前の関係性の中にも暴力性があるということをバトラーが言っているということかとの確認があった（大河内氏）。巻き込まれていること自体が責任を生むという言い方をしているとの回答があった（井川氏）。これを受けて大河内氏は、そうであればうまく繋がる気がすると述べた（大河内氏）。更に井川氏は、バトラーは融和とは最終的に言いたくなくて、不断のプロセスという形で問い続けていると述べた（井川氏）。これに対し、その通りであって、批判したのは判断の部分だと自分では思うが、その理解については再検討する必要があるとの回答があった（大河内氏）。

Ⅱ　自分自身を説明しようとしない人達に対する啓蒙か？

呼びかけに関する議論との関連で大杉氏は、livable でない人達の為になされたという点でバトラーに敬意を評するが、それは一つの文脈であり限定された状況下での戦いであって、汎用性のない議論ではないかと感想を述べた。その上で、呼びかけが挫折することの可能性を見ていないというのはその通りだが、挫折するという言い方をすると進歩主義的なエージェンシーを想定した議論のように聞こえてしまうと述べた。更に大杉氏は、「あなたとは何者か」という問いに対して細かに自分自身を対象化して応答する人は多くなく、人類学者が付き合ってきた人達の大半が自分自身を説明するという特殊技術には不得手であり、accountable になろうというゲームは極めて限定された領域で行われているのではないかと疑問を投げかけた。続けて、もしそのゲームをすることがあらゆる人間にとって倫理的要請だという議論だとすれば、その議論自体が特に自分自身を説明したいと思わない人達にとっては暴力的になりうると述べた。例えば人類学者タラル・アサドが『世俗の形成』において既存のエージェンシー論を批判し、抑えつけられたり傷つけられたりすること持つ存在（＝耐え忍ぶことで成立する存在）を捉えきれないと論じているが、そうした存在を語りに誘い出すことに対する暴力に対してバトラーのような論者は鈍感なのではいかと感じると、大杉氏は述べた（以上、大杉氏）。

これに対して大河内氏は、鈍感だとすれば自分であってバトラーではないと述べた上で、出発点は苦しんでいる人がいるという点にあると述べた（大河内氏）。大杉氏は、受苦を軽減することが良いことだとの普遍的前提があって、苦しみを受け取ることがその人の喜びである人に対する配慮がなく、彼らを啓蒙していく方向に繋がっているように見えると述べた（大杉氏）。これに対し大河内氏は、逆に自分を語らずに生活できている人がいかなる暴力に加担しているかという事を指摘していくことは大切だと思うと応じた（大河内氏）。ここで、自己の説明を与えることは良いことで、皆そうすべきだと、バトラーが言っているわけではない、という理解は正しいかという確認があった（武村氏）。これに対し大河内氏は、バトラーは皆それを常にやっているはずと考えていると答えた（大河内氏）。それはつまり、それをやってよい、やれるとわかりさえすれば誰もが率先してやるはずだとバトラーは考えているということか、と武村氏は再度尋ねた（武村氏）。大杉氏は、自己反省能力の高低という物差しを提示されているような気がして、暴力性にも気づくような能力の高い人が能力の低い人を啓蒙している気がしてならないと述べた（大杉氏）。これに関し、倫理的行為を行うことは責任を引き受けることかとの問いが出された（武村氏）。これに対し、二種類の倫理――既存秩序の倫理と、それを批判していくような倫理的態度――のうち後者はそうだとの回答があった（大河内氏）。これに対し、そうするとやはり倫理的態度、すなわち責任を引き受けることは良いことだとされて推奨されているように思えるのであり、例えばしばしばレイプ・サバイバーに対して、語ることがあなたの責任だ、と呼びかけるような例を耳にするが、その責任とはどういうことなのか理解できないとの声があがった（武村氏）。これに対し大河内氏は、ここで言われているのは自分で語ったことに対して責任を持つという話であって、他人に語る責任を諭す話ではないと応じた（大河内氏）。武村氏はその点になお疑問を呈し、バトラーは明らかに、語ることの責任を語ることで人間一般の倫理を語ろうとしているように見えると述べた（武村氏）。大河内氏は、語ることの責任ではなく、語ったことに対する責任であると再度説明した（大河内氏）。これを受けて大杉氏は、物語ることなしに人は生きられないと書かれている為、語ることがほぼ責務であるかのように聞こえて、なぜ語らなければいけないのかと驚くと述べた（大杉氏）。

それとの関連で深澤氏は、livable でない人達に寄り添って書いたとあるが、それは代弁なのか、語る主体として自らを提示した上で同じような立場を取るべきだと促しているのか、と問うた（深澤氏）。大河内氏は、自分の理解ではバトラーは代弁するというよりも別の可能性を理論的に提示することで寄与しようとしているのであり、マルクスの試みとも繋がると述べた（大河内氏）。深澤氏はそれはわかると述べた上で、様々な語り方がある中で、限られた人に届くであろう理論的言語で自分が語っているということをバトラー自身がどう理解しているのかに興味があると述べた（深澤

氏）。それを受けて武村氏は、バトラーの言う自己の説明を与えることというのは高度なことではなく、恐らくは赤ん坊から次第に成長して言葉が話せるようになった子供に対して「嫌なら嫌と言いなさい」と諭すようなレベルのであるのかと問うた（武村氏）。これを受けて、嫌か嫌でないか一口に言えない局面は沢山あるのであり、嫌か嫌でないかを一々選択していたら忙しくて生活できないと思うという声が挙がった（大杉氏）。

ここで真田氏が、弱い人達は語る能力を持たないのではないかと大杉氏は言われたが、『生のあやうさ』において喪失に曝されたことでやるべきことすら出来なくなってしまう状況が論じられていることを踏まえると、バトラーの問題意識は「嫌なら嫌と語らなければならない」を語る際にも規範に則る必要があるゆえに一種の暴力性を孕むことにあるのであって、決して能力のない人に諭しているわけではないと述べた（真田氏）。武村氏は、それは嫌か嫌でないかという二者択一では語れないことを二者宅一つで語らされる時にどう振る舞うべきかという話かと問うた（武村氏）。大杉氏は、語ることの困難さを引き受けている点でこの手の議論の中ではバトラーは極めてまともだと思うし、語らなければならない当のものが語る際に依拠する規範からはみ出す残余の部分にしかできないということ、つまり自己は押された鋳型とのズレとしてしか立ち現れないということに意識的だという点にも共感するが、語ることの困難さと言う時に語らねばならぬという大前提は疑わしいと述べた（大杉氏）。それに対し真田氏は、そうだと思うが、自分としてはそれは大前提になっているとは思えず、アガンベンの『バルトビー』（「語らない人」の意）との関連があると思っていると述べた（真田氏）。この議論の流れを受けて大河内氏は、ヘーゲルの良心論に出てくる「美しき魂」は行為や語ることの出来ない人のことの話であり、ヘーゲルにとって語れない人は消滅していくしかないと考えていて、その事は恐ろしさはあると思うと述べた上で、十分に処理できてはいないが本稿の脚注 36 や p. 148 で言及していると指摘した（大河内氏）。大杉氏は、自分が語らないということで言っているのはそうしたことではなく、刻印を押されて呼びかけに答えようとしてもその通りにはまず生きてけないことであり、その人達が語るべきだという教育を受けなくとも生きているということに言及しないということだと述べた（大杉氏）。これを受けて井川氏は、アガンベンの潜勢力をバトラーは評価しているが、それはただ存在しているだけて良いことを肯定したいからであろうし、真田氏の指摘はそのことだろうと述べた（井川氏）。大杉氏は、それなら全く問題を感じないが、潜勢力と言うと立ち現れることを前提としているように聞こえるので、立ち現れなくてもいいと思ってしまうと述べた（大杉氏）。では大杉氏はどうしたいのかという問いが出た（大河内氏）。大杉氏は、呼びかけ違反を常に犯してしまう人達がどのような社会空間を作り上げていくかを追うことを考えていて、事後的に生じた社会空間を記述する事と痛みを記述すると事は

少々異なると考えていると述べた（大杉氏）。これに対し大河内氏は、前者が大杉氏の態度ならば、社会変革をしたいと考える自分のモチベーションと違うと述べた（大河内氏）。

Ⅲ　メタ判断

ここで、自分について説明できない人に説明しろと諭すことを大杉氏は問題視しているのかという確認の質問があった（井頭氏）。大杉氏は、その通りであり、生きるというゲームと生きている現状について了解可能に説明するというゲームは違うゲームだと答えた（大杉氏）。井頭氏は、自分の理解ではバトラーはそういう風に要求しないと思えるのであると述べた上で、普通にしてたら生きていけない人達が語らなければならないことが問題化されているのであって、人類学者が出会うような自集団の中で生きていけるがゆえに語る必要のない人についてはバトラーの問題にならないと感じると述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、先住民運動や開発の文脈で語らない人達に語るよう求める場面が登場すると指摘した上で、バトラーの話はあくまでメトロポリスに住まう人達の話として理解するのであれば素晴らしいと思うと述べた（大杉氏）。

これを受けて井頭氏は、自分のことをうまく説明できない人達の集団の中にも排除されて livability を奪われている人達がいて、仮にそうした人達が自殺が続いているという状況があれば何らかの形で救う必要があって、その際にバトラーの議論が役立つならば悪い事ではないと述べた上で、livability を奪われた人達がバトラーの想定とは異なる生活空間を営んでいるのであれば比較するのは興味深いのではないかと述べた（井頭氏）。大杉氏は、個人的に救おうとすることがあったとしてもそれが学問的に良いか悪いかは答えられてないと応じた上で、そこまでいかないような事柄（ex. 西欧フェミニズムと第三世界フェミニズムの間で論争を呼んだ クリトリス切除）に対して外側から抑圧を過剰に読み込むことがあることを踏まえれば、個別の現場の規範に対して敏感、少なくとも用心深くあるべきだろうと述べた（大杉氏）。井頭氏は、そのポイントはよくわかるが、バトラーの議論はそれとは関係ないのであり、選択肢がある中でより良くなるという話をしているわけではないと思うと述べた（井頭氏）。これに対し、岩品氏は自分は関係あると思うと述べた上で、大杉氏の前提としているスピヴァクを読む限り、スピヴァクは西欧の言説空間を引き受けて語っていることをどう考えるべきかと模索しており、非西欧の中に語ることができていない人達がいることを遺産のように保存するのではなく、実はそういう人達も変わりうるのだということを主張していると思っていると述べた（岩品氏）。これに対し、当人達が変わり

たいと思ってない場合、つまり単に悪しき因習として残っているわけではない場合には、それを排除すべきものと想定する必要がないのではないかという疑問が投げかけられた（大杉氏）。真田氏は、自分の問題にしているのは排除ではなく語りであり、例えばサバルタンが呼びかけに応じて実際に語り始めて、こちらの望む語りと違うものが出てくる場合もあるだろうが、そういうことが重要なのではないかと述べた（真田氏）。

武村氏は、誤解を招く恐れがあると断りつつも、livable でない人達がいるという事はよくないことであるのかという根本的な問いを出した（武村氏）。これに対し大河内は、そこを疑う人とは戦うしかないと決意を表明した（大河内氏）。これに対し、確かに「生きるに値する」という表現と livable である事という表現の間には相当な距離があると思うが、livable とはどのような状況なのかという問いが出された（大杉氏）。武村氏は、それはつまりメタ規範の問題であろうと応じ、仮に、livable でない人がいたってよいではないかと判断する人がいるとしたら、大河内氏はその人と闘うと仰るわけでが、そこでは、ある判断が善い／悪いということを判断するメタな審級が働いているのであって、その審級をどこに設定しているのかと問うた上で、バトラーが「再分節化という政治的実践が依拠する一つの規範が存在することを意味する」（p. 149）と述べていることの意味を説明して欲しいと要望した（武村氏）。これに対し大河内氏から、その意味についてバトラー自身は具体的には説明していないが、自分の依拠するメタ的な規範は「unlivable な生しか持ち得ない人がいるとしたら改善されるべきだ」というものだと応答があった（大河内氏）。それは、livable でないような生を livable なモノに変えるような再分節化の試みは正当化されるということかとの確認があり（井頭氏）、そうだとの応答があった（大河内氏）。これを受けて、ある再文脈化の試みがその方向に向かっているということはどうやって判断するのか、例えば p. 148 に出てくる 2 つの例――南アにおけるアパルトヘイト下での権利要求運動とヒトラーによる「ある種の生」に対する権利要求――とはどういう部分で違うと判断されるのか、と問いが出された（武村氏）。大河内氏は、それに違いがないと自分は書いたわけで、そこに根拠はないと述べた（大河内氏）。これに対して大杉氏は、根拠はないけれども、そこは暴力的に判断せざるをえないのだということだろうと補足した（大杉氏）。大河内氏はそれに応じて、それに関して自分がなぜ「態度」と書いたかと言えば、根拠づけの出来ない態度でしかないと思ったからだ応じた（大河内氏）。

それに対し、根拠づけを放棄してしまえば、この議論は全て無に帰すのではないかという疑問が投げかけられた（武村氏）。これに対し、そう思わないとの回答があった（大河内氏）。大杉氏は、この話はもっと繊細に暴力を振るおうという話に聞こえてしまうが、この毒消しの暴力は、実のところ、日常的に脱文脈化しながら邪悪さや

毒を飼いならしつつ生きる、ごく一般のひとびとの暮らしの在り方とは相容れないのではないかと感じると述べた。その上で大杉氏は、livable でないと自ら発言したり、或いはそういう風に代理表象できると思っている人達がいる場合にそうした活動は重要だと思うが、全ての人が「やがて」は声を持つべきだという前提があって語ることがいいことだという風に読めると述べた（以上、大杉氏）。もし他にあるならそれで行きたいが、これが臨界で他にないと思うとの声があがった（大河内氏）。

井頭氏はメタ規範の正当化について話を戻し、事前に何らかの規範を引き受けることで誰に対する暴力にもならないことは不可能だということを前提として、バトラーは何らかの判断が暴力を呼ぶのだから判断を先行させないような倫理の可能性を模索しているように見えると述べた。その上で、大河内氏についてはメタ規範が暴力に転ずる可能性とその責任をセットで引き受けて、改訂に開かれたものとして暫定性を保持するというスタンスを取っているような気がするが、その理解でよいかと井頭氏は問うた（以上、井頭氏）。大河内氏はそれでよいと述べた上で、アパルトヘイトの権利要求とヒトラーのそれのどちらが正しくてコミットすべきかというメタ規範を自分は持たないが、でもナチスには抵抗し、権利獲得には協力するだろうと応じた（大河内氏）。武村氏は、恐らく自分も同じようにするだろうが、それはいわば「たまたま」そうしたいからそうするのであって、自分の場合から倫理的考察が導きだせるとは思わないと述べた（武村氏）。岩品氏は、ゴフマンの『スティグマ』においてレッテルを貼られた人が声を上げて社会変革をする場合に社会心理学的要因があると指摘しているように、したいからするという考えや欲望は社会的に構成されているのではないかと述べた（岩品氏）。武村氏は、無論そうであるとした上で、だからこそ、どういう社会的要因に基づいてなぜナチは悪く南ア権利要求は良いと判断されるのか、そこのところの倫理的規範を探ることはなしに暴力的判断に依拠していてもそこから何もでてこないだろうと述べた（武村氏）。それを受けて大杉氏は、武村氏の意図は、受けてきた教育や様々な社会関係の中で作られた受動的な自己だということは認めるがそれを学問的判断とは結び付けて積極的に推奨するわけではないということだろうと述べた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、自分としてはそれに反対だと述べ、なぜならそうした語り方の背後には何が良いか悪いかというコミットメントを一切はずした所で議論が可能だという前提があるからであり、現実に「一が善い」という概念を学ぶ時には善い事の範型とセットで学んでいるという事実を無視しているからであると述べ、そうだとすれば染み付いたものであれ社会的コミットメントが善いことだと言えるのではないかと述べた（井頭氏）。大杉氏は、その考え方に社会的な善が常に失敗し続けるという点では賛同するが、暴力的だから変革しようという積極的な働きかけには自分は乗らないと述べた（大杉氏）。

それを受けて武村氏は、私達は善悪に関する観念を各人持っていて、多少の食い違いがあっても大抵の場合さほど軋轢をきたざすに暮らしてもいるが、例えばアパルトヘイト下の権利要求は良くてとヒトラーのそれは良くないという場合には、前者を良しとし後者を悪いとして、どちらも同じ倫理的態度であるかもしれないということを認める必要があるのではないかと問う姿勢を、大河内氏は倫理的態度として認めない、ということかと問うた（武村氏）。これに対し大河内氏は、その２つは livability を認められてない人に livable な空間を提供する点で同じ要求のはずで、それを認めるとどちらも倫理的になってしまうが、それでも後者は倫理的でないとすると述べた（大河内氏）。その部分は暴力的に決めているということかの確認がなされた（武村氏）。これに対し大河内氏は、それがいいとは思ってないがそれ以上に言えないだけであり、善いということとその内容が結び付いているのだけどその結合の仕方を変えようというのが基本だと述べた（大河内氏）。武村氏は、ある局面では結び付け方を変え、別の局面ではそれは変えてはいけないという話になるはずで、その間の線引きは根拠なしに決めているという暴力を自分で引き受けるというのが大河内氏のスタンスだというのはわかると述べた（武村氏）。井頭氏は、アパルトヘイトとヒトラーの話がどちらも livability を確保する作業であるとすれば言葉の恣意的な問題を組み替えることは可能だろうが、livability を確保することが善いこととしなければ自分の中で善いという概念を保てなくなるので動かせないだろうと述べた（井頭氏）。それを受けて武村氏は、自分としてはそこは崩れても、善の意義は崩れないと思うと述べた（武村氏）。その議論が成立するのはなぜなのか、他のところでステレオタイプ的なものを確保しているからなのかという問いが出た（大河内氏、井頭氏）。武村氏は、多分自分は善いということがわかっておらず、その都度の文脈で善を考え、判断しているのだと思うと述べた（武村氏）。これを受けて大杉氏は、この基準でこの人を排除しようというのは大綱領がある場合であり、首尾一貫しておらず文脈や規範を入れ替えることで柔軟に日常を生きていくというのが生活知だと思うと述べた（大杉氏）。これに対し、後者の話はバトラーの考えていることではないのではないかという確認の質問があった（大河内氏）。大杉氏は、確かに違って、バトラーは非常に用心深いが、暴力をより少なくする、あたかもどこかに神の世界があるかのような方向に一直線に走っていくという印象が自分にはあると述べた（大杉氏）。井川氏は、それはバトラーが当事者として切実だからではないかと述べ、確かにスピヴァク的なメトロポリタンの知識人の語りに似た胡散臭さはあると述べた。だが、バトラーはクィアの人達を中心とした自分の周囲で生きれらない人達の声を聞き、自分の声が聞かれやすい環境にあることをわかった上で、慎重に表象代理をしたいと思いがあると述べた上で、切実さを切実に語る為には覇権言語で語っても狂気の声として無視されてしまうがゆえに彼女はこの言語で語っているのだと思うと述べた（以上、井川氏）。大杉氏は、

その切迫性の範囲内でならよいと述べた（大杉氏）。井川氏は、当事者主義を押し付けられると私達が関与する余地を失うので、当事者でない人とどう意思疎通をするかのギリギリの所で努力した結果がこの文体なのだと思うと述べた（井川氏）。これを受けて大杉氏は、そうであるからこそ違う文脈にいる自分に適応して汎用性のあるものとするのは危ういと考えており、あくまでメトロポリスの中で声が聞こえないという限定付きの領域に関する議論としては慎重で大胆だと思うと述べた（大杉氏）。

Ⅳ livable を求める権利要求が排除を伴う場合

ここで理論的言語とバトラー自身の位置づけに話を戻し、狭い知的生活空間を越えてバトラーは議論を発しているのかという問いが出された（深澤氏）。大河内氏は、考えているとしか言いようがないと応じた（大河内氏）。であるとすれば、いかなる社会形態で言われているのか、或いは普遍的妥当性をどの程度持つものとして構想されているものなかという問いが出た（深澤氏）。大河内氏は、バトラー自身は基本的に当事者として自分の周囲にいる人達について語るという部分から出発しているが、それ以外の発言もしており、自分個人としてはバトラーの議論を一般化できると考えていると述べた（大河内氏）。これに対して武村氏は、例えばゲイやレズビアンは第三世界を除けばかなり livable になってきていると思えるが、性的少数者をめぐる議論において常に SM と幼児性愛は切り落とされる傾向にあり、一般かと言いながらも彼らの生き難さは切り捨てるのかという点で、やはり引っ掛かると述べた（武村氏）。大杉氏も、ユダヤ人に代表されるようなヨーロッパの他者性が基本的な参照枠になっていて、適応可能性を問題にするような議論をバトラーがしているかがどうかが問題であり、現実にはスピヴァクに見るように対象とする他者とコミュニケーションが成立しないことが多く、この話が普遍的適応性として理解される傾向にあるからこそ用心深くあるべきだと思っていると述べた（大杉氏）。これに対し大河内氏は、取り込もうとしているわけではなて、秩序自身が様々な絡み方をしている中でローカルなレベルでどこを組みかえ、苦しみをなくすかという話だと思っている（大河内氏）。

大杉氏は、苦しみをどうやって同定するのか、livability 自体がある解釈共同体内の規範ではないのかと問うた（大杉氏）。武村氏は、苦しんでいる人達がいるのだから助けなくてはという議論において、そのように語りかけてくる人たちが全く無前提に自分（＝武村）を苦しんでいない側に分類しているのを常々可笑しく思っていると述べた（武村氏）。大河内氏は、その時に誰かが苦しんでいるかどうかわからないという態度を取るのではなく、誰かが苦しんでいるかもしれないという態度を取ればいいのではないかと応じた（大河内氏）。大杉氏は、誤解を恐れずに言えばそれは俯瞰的

位置にたってると自認するものの一種の病であり、例えば日常知のようにすり抜けて生きていくような生き方はこの枠組みからしたら知解不能なのではないかと述べた（大杉氏）。深澤氏は、病は言い過ぎだろうが一種の信仰だとは思うと同意した上で、livable でなくていい人という線引きも可能になるのではないかと問うた（深澤氏）例えば、他人の livability を侵害することによってしか自らは livable であれない人をどうするのかという問いが出た（武村氏）。深田氏は、本稿で指摘されているナチスと南アフリカの話は遠い話だから判断可能であるが、近くで生じていて利害関係が生じて一方が livable になると他方がそうではなくなる場合、更にその際に声を出さなくともお金で解決できてしまう場合があることを踏まえると、どういう問題が声を出すべき／出さなくてすむ問題なのかと問うた（深田氏）。大河内氏は、理論に要求し過ぎであり、ad hoc に決めるしかないと思うと応じた（大河内氏）。深田氏は、適応可能性という観点からすれば、広げていくと読み間違う可能性が経験的には多いと思っていて、それは暴力であることを認知していればいいという所では回収できないのではないかと述べた（深田氏）。大河内氏は、理論の持つ暴力性と、理論が誤解されたことによって生まれる暴力性を、同じように理論の責任にするのはおかしいと応じた（大河内氏）。深田氏は、誤解されることもわかった上で判断するというのは無敵の理論ではないのかと問うた（深田氏）。大河内氏は、変更の可能性を担保していることで責任を回避できるわけではなく、その都度の判断については責任を取らねばならないという話だと応じた（大河内氏）。深田氏は、その姿勢は極めてプラグマティックでいい態度だとは思うが、この理論自体は無敵の理論になっている気がしており、何でも OK で自分の覚悟は大きいと述べているように聞こえると応じた（深田氏）。

これを受けて武村氏は、ある部分では判断という暴力を引き受けなければならないという主張態度に関しては本稿の議論や結論に大いに賛同するが、やはりメタ判断の部分を投げずに議論して欲しいと述べた（武村氏）。大河内氏は、それは議論可能なことだろうかと問うた（大河内氏）。武村氏は、可能ではないようには思えるからこそ敢えて試みるのが脱文脈ではないのだろうかと応じた上で、livability のない人の為に戦うべきだとか、unlivable な人が少ないほうがいいといった、議論の余地がないと一般に考えられているところで敢えて議論するのが哲学者ではないのかという漠然とした憧れを抱いているのであると述べた（武村氏）。井頭氏は、「倫理的に善いとはどういうことか」について考える人と、「倫理的に善い事をしよう」と考える人との間にはスタンスのズレがあって、本稿の末尾では後者の方にシフトしているからコミットメントの問題が前面にでてきているのではないかと述べた（井頭氏）。大河内氏は、自分が倫理的に良い事をしようというと考えている根拠はないと応じた（大河内氏）。武村氏は、それならば賛成すると述べた上で、この話は「だって暴力なしはありえないでしょう」という平明な言葉で語れそうだが、そうした平明な言葉で人生哲

学として語るのではなくて哲学の言語で語ることで、単に個々人の意見の相違を確認して排斥しあうことになるのを避けられるという側面はあるのではないかと述べた（武村氏）。深澤氏は、根拠なしというのはわかるが、問題が ad hoc に生じることを踏まえれば、根拠ではなくて正当化は必要でありなしうるのではないかと問うた（深澤氏）。大河内氏はそれに同意した上で、正当化可能な言説空間を作るということだと応じた（大河内氏）。これに対し大杉氏は、本稿で挙がっている例が直感的に理解可能な例ばかりだが、たとえばフィデル・カストロのゲリラ闘争などの例は判断できるのかと問うた（大杉氏）。大河内氏は、これはわかりやすい例であることに意味があって、わかりすいけれども２つの例――ナチスの権利要求と南アのそれ――が等価だとして提示しているつもりだと述べた（大河内氏）。大杉氏は等価であっても、にもかかわらず我々は判断しなければならないのという話ではないのかと確認し、大河内氏はそうだと応じた（大杉氏、大河内氏）。大杉氏は、バトラーを引き受けるとその生は過酷だ、という議論だろうか、脱文脈化はこうしてどんどん脱文脈化されていくのだろうかと述べた（大杉氏）。